

# 人口問題研究

## 第五卷 第二號

### 調査研究

#### 夫婦關係持續期間と出産力

岡崎 文規

知ることが出来るからである。しかるに、「母の年齢に依り分ちたる出生」統計は年齢によつて分ちたる異集團の母におけるそれらの出生数を示したものにすぎないから、これによつて、眞の出産力を觀察することは出来なす。

第二に、眞の出産力を觀察すると同時に、夫婦關係持續期間別による無子夫婦殘存率を知ることが甚だ重要であるやうにおもはれる。無子夫婦殘存率といふのは、同一の年齢で結婚した妻の一集團について、夫婦關係持續期間を順次に辿りつゝ、それらの年齢における無子の妻と有子の妻との比率によつて算出するものである。

「母の年齢に依り分ちたる出生」統計はそれらの年齢における母の出生数を示したものにすぎないから、年齢別による有配偶女子との對比によつて、出産力は一應計算され得るとしても、無子夫婦殘存率を計算することは出来ない。有配偶女子のうち、或年齢において出産しなかつた妻はすべて無子であるとはいへないのであつて、すでに子女ある妻にして、その年齢において出産を休止したにすぎないものも含まれてゐるからである。

第三に、「母の年齢に依り分ちたる出生」統計は、母のそれらの年齢における出生児について、その出生序列ならびに出生序列別出生間隔を示してゐないから、出生序列別による出産速度を計算するには、何の役にも立たないのである。

出産力に關するかゝる精細な研究を遂げるには、母の年齢に依り分ちた

内閣統計局編纂の「人口動態統計」には「母の年齢に依り分ちたる出生」に關する統計が収録されてゐて、出産力の研究に役立つ資料ではあるが、これにはなほ多くの不滿な點がある。これを指摘すれば次の如くである。

第一に、出産力は、同一の年齢で結婚した妻の一集團について、夫婦關係持續期間を順次に辿りつゝ、それらの年齢における出生數と妻の數との比率によつて算出することが最も望ましい。これによつて眞の出産力を

夫婦關係持續期間と出産力

る出生」統計に頼ることは出来ないものであつて、その資料を他に求めるほかない。

厚生省人口問題研究所では、かつて「出産力調査」を行つたことがあるので、私は、この調査票の一部を再集計して、夫婦關係持續期間と出産力との關係を觀察するに必要な統計資料を作製した。もつとも、この統計資料は、私だけの手で作製したものであるから、觀察數は極めて少く、標本的のものにすぎない。

再集計するにあつて、次のやうな基準に據つて調査票を抽出した。

一、雙方とも初婚の夫婦なること。

出産力を計算するには、初婚者と再婚者とを區別することが好ましいと考へたからである。有配偶女子と出産力との關係は、再婚の者に較べて、初婚の方の方が重要な意味をもつてゐるし、またその割合からいつても、初婚の方が遙かに大である。

二、夫婦關係持續期間十五年以上のものなること。

妊娠期間經過後の夫婦のみを抽出することが望ましいのであるが、この條件を適用すると、再集計に使用し得る調査票が一層少數になるので、夫婦關係持續期間十五年以上のものを抽出することにしたのである。従つて抽出せる調査票のうちには、夫婦關係持續期間が十六年、十七年、或ひはこれ以上に達してゐるものも含まれてゐるが、十五年のところを打切つて、集計した。それで妊娠閉止期に至るまでの出産力の傾向は、十五年間に於ける出産力の傾向に基いて、別に推算する方法をとることとした。

三、農業者については、妻の初婚年齢二十二歳のもの、都市生活者については、妻の初婚年齢二十五歳のものをつた。農村における妻の平均初婚年齢は約二十二歳であり、都市における妻の平均初婚年齢は約二十五歳

であるからである。この場合、それ／＼の初婚年齢における妻について調査する必要はない。異なる集團における妻の出産力を調べるには、各歲別にこれを調査するほかないが、同一集團の妻について出産力を調べる場合には、夫婦關係持續期間を順次に辿ることによつて、それ／＼の年齢における出産力は自ら明かになるからである。

以下、調査の結果について、その概略を説明したい。

二

右に述べた諸條件に基いて抽出せる調査票數は、初婚年齢二十二歳の妻七四四、初婚年齢二十五歳の妻二〇七であつて、まづ第一に、夫婦關係持續期間別新生兒數および出生率を示すと、次頁の第一表の如くである。

出生率は、それ／＼の新生兒數を夫婦數をもつて除した値である。すなはち初婚年齢二十二歳の妻における出生率は、夫婦關係持續期間別新生兒數をその夫婦數七四四で除した値である。また初婚年齢二十五歳の妻における出生率は、夫婦關係持續期間別新生兒數をその夫婦數二〇七で除した値である。

内閣統計局の「母の年齢に依り分ちたる出生」統計から母の年齢別出生率を計算する場合には、年齢別に異なる集團における母の出生兒數を、齡態統計に示されてゐるところの、年齢別に異なる集團における有配偶女子數と對比して計算されることになる。

同一集團の妻について、その夫婦關係持續期間を追ひつゝ計算された出生率は出生率の真相を示すものと考へるので、私の計算した出生率の方が、理論的に價値あるものゝやうに信ぜられる。たゞ觀察數の乏しく、標本調査の結果を示すにすぎないから、この結果をもつて、全般を律しよう

とするものではない。これと同一の方法による大調査が行はれ、信頼度の  
 高い結果の發表されることは最も望ましく。

第一表 夫婦關係持續期間別新生兒數

夫婦關係持續 期間別	初婚年齡二二歲ノ妻		初婚年齡二五歲ノ妻	
	新生兒數	出生率	新生兒數	出生率
一 年	三七	〇・三	五	〇・七
二 年	三三	〇・四	五	〇・六
三 年	三二	〇・六	六	〇・八
四 年	三六	〇・三	七	〇・六
五 年	三四	〇・三	六	〇・九
六 年	三三	〇・三	六	〇・三
七 年	三四	〇・三	五	〇・六
八 年	三〇	〇・三	四	〇・三
九 年	三七	〇・元	五	〇・七
一〇 年	三九	〇・六	四	〇・三
一 一 年	三六	〇・三	四	〇・四
一 二 年	三四	〇・三	三	〇・六
一 三 年	一六	〇・五	三	〇・八
一 四 年	三〇	〇・七	三	〇・五
一 五 年	一八	〇・四	三	〇・二
合 計	三、三七	四・七	七〇	三・四

右の第一表で、まづ初婚年齡二十二歳の妻の出生率をみると、結婚後一  
 年、すなはち二十三歳における出生率は三二%である。結婚後二年、すな  
 はち二十四歳における出生率は四三%で、最も高い。それ以上の夫婦關係  
 持續期間における出生率は、多少の高低があるが、結婚後十一年、すなは  
 ち三十三歳までは、二八%乃至三六%である。しかるに結婚後十一年以上

夫婦關係持續期間と出生力

に及ぶと、出生率は年と共に次第に低下してゐる。すなはち妻の年齡が三  
 十三歳を越えると、出生力は次第に弱化する。

次に初婚年齡二十五歳の妻の出生率をみると、結婚後一年、すなはち二  
 十六歳における出生率は二七%であり、結婚後二年、すなはち二十七歳に  
 おける出生率は三六%であつて、最も高い。結婚後二年における出生率の  
 最も高いことは、初婚年齡二十二歳の妻の場合と同一である。

それ以上の夫婦關係持續期間における出生率も、初婚年齡二十二歳の妻  
 の場合と全く同一の傾向を示してゐて、結婚後十一年までは、年によつて  
 多少の凹凸があるが、結婚後十一年以上に及ぶと、次第に低くなつてゐ  
 る。しかも相當に大なる低下を示し、結婚後十五年、すなはち四十一歳に  
 おける出生率は僅か一一%にすぎない。三十七、八歳以上に達すると、妻  
 の出生力は生理的に激減するものとおもはれる。

最後に初婚年齡二十二歳の妻における出生率と初婚年齡二十五歳の妻に  
 おける出生率とを較べると、いづれの夫婦關係持續期間においても、前者  
 は常に劣つてゐる。故に結婚年齡の高いものゝ出生率は劣つてゐるとい  
 つて差支へないであらう。殊に夫婦關係持續期間十一年以上における出生率  
 は、前者において著しく低く、後者の半分或ひはそれ以下である。

しかし、同一年齡における兩者の出生率はどういふ關係にあるであらう  
 か。前者における結婚後一年の出生率と後者における結婚後四年の出生  
 率、前者における結婚後二年の出生率と後者における結婚後五年の出生率  
 といふ風に較べてみると、兩者の出生率の間には大した距りのないことが  
 わかる。故に同一の夫婦關係持續期間における兩者の出生率を較べると、初  
 婚年齡二十五歳の妻における出生率は、初婚年齡二十二歳の妻における出  
 生率よりも常に劣つてゐるが、それは三歳づゝ年齡が高くなつてゐるから

である。こゝにおいて、比較的若く結婚した妻は、妊孕可能期間が長いばかりではなく、妊孕能力の旺盛なる年齢が夫婦關係持續期間中に含まれるから、全體としての出産力は高くなるのである。すなはち初婚年齢二十五歳の妻は、夫婦關係持續期間十五年にして三・四八の平均出生兒をもつにすぎないが、初婚年齢二十二歳の妻においては、それは四・五七に達してゐる。

右に述べたところは、夫婦關係持續期間別に、新生兒の出生割合を觀察したのであるが、次に夫婦關係持續期間別に、出生序列別出生兒數を觀察しよう。これによつて、夫婦關係持續期間別に平均出生兒數を知ることが出来る。左の第二表は、初婚年齢二十二歳の妻および初婚年齢二十五歳の妻における夫婦關係持續期間別による出生序列別出生兒數を示したものである。

三

第二表 夫婦關係持續期間ニヨル出生序列別出生兒數

其ノ一

結婚經過年數	出生兒數		夫婦數		平均出生兒數
	出生兒數	夫婦數	出生兒數	夫婦數	
一年	57	37	37	37	1.55
二年	37	55	55	50	0.70
三年	37	55	50	48	1.01
四年	37	55	50	48	1.01
五年	37	55	50	48	1.01
六年	37	55	50	48	1.01
七年	37	55	50	48	1.01
八年	37	55	50	48	1.01
合計	37	55	50	48	1.01

妻初婚年齢二十歳の場合

妻初婚年齢二十五歳の場合

結婚經過年數	出生兒數	夫婦數	出生兒數	夫婦數	平均出生兒數
一年	57	37	37	37	1.55
二年	37	55	55	50	0.70
三年	37	55	50	48	1.01
四年	37	55	50	48	1.01
五年	37	55	50	48	1.01
六年	37	55	50	48	1.01
七年	37	55	50	48	1.01
八年	37	55	50	48	1.01
合計	37	55	50	48	1.01

十三齡年婚初ノ妻

合揚ノ歳二十二齡年婚初ノ妻

合場ノ歳五十二齡年婚

五 四 三 二 一 〇

平均出結見數 計 子

平均出結見數 計 子 子 子 子 子

夫婦關係持續期間と出産力

結婚經過年數	出生兒數																		
	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數	夫婦數
九	元	壹	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元
一〇	元	壹	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元
一一	元	壹	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元
一二	元	壹	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元
一三	元	壹	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元
一四	元	壹	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元
一五	元	壹	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元	二元

五 六 七 合	子 子 子 場	計	三〇九	五〇一	三〇九	五七七	三〇七	五九六	三〇七	三〇四	三〇三	三〇三	三〇三	三〇三	三〇三	三〇三	三〇三	三〇三	三〇三
平均出生兒數			三、四	三、五	三、六	三、七	三、八	三、九	四、〇	四、一	四、二	四、三	四、四	四、五	四、六	四、七	四、八	四、九	五、〇

第二表によつて、まづ初婚年齢二十二歳の妻における夫婦關係持續期間別平均出生兒數を見よう。結婚後一年にして、〇・三二の子女を、三年にして、一兒を、六年にして、二兒を、十年にして、三兒を、十三年にして、四兒を出産する。

結婚以來、夫婦關係持續期間十五年間に出生子女數の増加する傾向は、次頁の第一圖によつて明かな如く、ほぼ直線的に上昇してゐる。

次に初婚年齢二十五歳の妻における夫婦關係持續期間別平均出生兒數をみると、結婚後一年にして、〇・二七の子女を、四年にして、一兒を、八年にして、二兒を、十二年にして、三兒を、そして十五年に至つてもなほ四兒を出産しないことになつてゐる。

この場合、結婚以來、夫婦關係持續期間十五年間に出生子女數の増加する傾向は、次頁の第一圖によつて明かな如く、緩慢な曲線を描きつつ上昇してゐるのである。

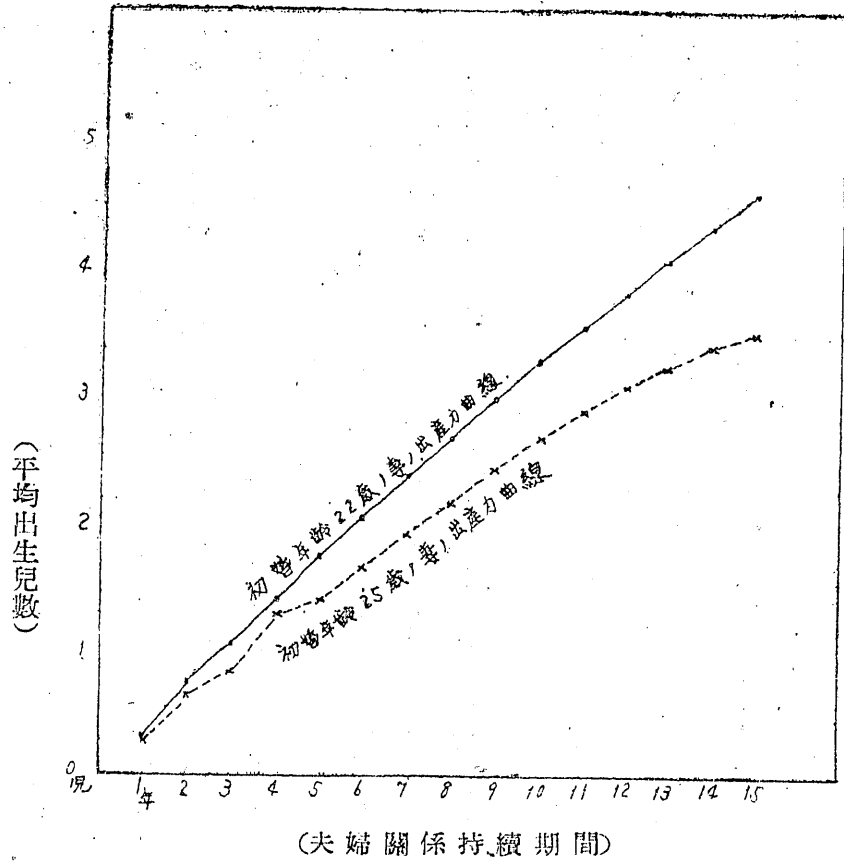
次に同一の夫婦關係持續期間における平均出生兒數を、初婚年齢二十二歳の妻と初婚年齢二十五歳の妻とを比較対照すると、後者は、常に前者よりも劣つてゐる。すなはち結婚後一年にして、前者は〇・三二の平均出生兒をもつてゐるが、後者は〇・二七の平均出生兒をもつてゐるにすぎない。また前者は、結婚後三年にして、一・〇二の平均出生兒をもつてゐるが、後者は、これより、一年おくれて、結婚後四年にして、一・二八の平均出生兒をもつてゐる。前者は、結婚後六年にして、二・〇二の平均出生兒をもつてゐるが、後者は、これより、一年おかれて、結婚後七年にして、一・八七の平均出生兒をもつてゐる。前者は、結婚後八年にして、二・一五の平均出生兒をもつてゐるが、後者は、これより、二年おかれて、結婚後十年にして、三・二三の平均出生兒をもつてゐるが、後者は、これより、三年おかれて、結婚後十二年にして、四・〇四の平均出生兒をもつてゐるが、後者は、これより、四年おかれて、結婚後十五年を経過しても四兒を出産することは出来ないのである。

いま、前者の平均出生兒數に對する後者の平均出生兒數の比率を、それぞれの夫婦關係持續期間別に計算すると、左の第三表の如くである。

第三表

夫婦關係持續期間	初婚年齢二二歳ノ妻ノ平均出生兒數ニ對スル 初婚年齢二五歳ノ妻ノ平均出生兒數ノ割合
一 年	八七・一%
二 年	八五・一
三 年	八〇・四
四 年	九二・八
五 年	八〇・一
六 年	八一・七
七 年	八〇・八
八 年	八二・〇
九 年	八二・〇
一〇 年	八一・六

第一圖



夫婦關係持續期間と出生力

(平均出生兒數)

(夫婦關係持續期間)

一	二	八〇〇
一	三	七九〇
一	四	七八〇
一	五	七六〇

初婚年齢二十五歳の妻における平均出生兒數は、夫婦關係持續期間十年以上に達すると、初婚年齢二十二歳の妻における平均出生兒數に較べて、いよいよ少くなることは、第一圖を見れば、容易に看取し得るところであるが、右の第三表によつて、これを數字的にはつきりと認めることが出来る。すなはちいづれの夫婦關係持續期間においても、初婚年齢二十五歳における妻の平均出生兒數は、初婚年齢二十二歳における妻の平均出生兒數に較べて、常に少くはあるが、夫婦關係持續期間十年未満のところでは、大體、八五%乃至九三% (夫婦關係持續期間八年における八〇・五%は例外) であり、そして年を追うて次第に減少するやうな傾向も窺はれないのである。しかるに、それが十年以上に達すると、ほとんど規律的にそれが減少してゐる。すなはち夫婦關係持續期間が十年以上に達すると、初婚年齢二十五歳の妻における平均出生兒數は、初婚年齢二十二歳の妻における平均出生兒數に較べて、著しき割合で減少してゐるのである。

初婚年齢二十五歳の妻は、初婚年齢二十二歳の妻に較べて、その出生力は何故に劣つてゐるのであるか、特に夫婦關係持續期間十年以上においてそれが著しいのであるか。

その重要な原因の一つは、結婚年齢の大小にあるにちがひない。初婚年齢二十二歳の妻は、結婚後一年にして、〇・三二の平均出生兒數をもつて對して、初婚年齢二十五歳の妻は〇・二七の平均出生兒數しかもたない理由としてまづ第一に擧げなければならぬことは、生理的な妊孕能力が、二十五

歳の妻に對比して、二十二歳の妻の方が大であらうといふことである。

しかし、いま一つ考へなければならぬことは、出産意欲の問題である。初婚年齢二十二歳の妻は農村生活者であり、初婚年齢二十五歳の妻は都市生活者である。例へば初婚年齢二十二歳の妻は、結婚後二十五歳に達した年の子女總數をみると、一・〇二七であり、そのうち七六一は過去三年間に出生したものであるから、二十五歳で出生した子女數は二五六になる。これを妻の總數七四四で割ると、平均子女數は〇・三四となる。これは初婚年齢二十五歳の妻が、一年間に第一子を出産した平均子女數〇・二七よりも遙かに多く、また初婚年齢二十二歳の妻が最初の一年間に出生した平均子女數〇・三二よりも多くなつてゐるのである。これで見ると、二十二歳における妊孕能力は二十五歳における妊孕能力よりも大であるとも斷定出來かねる。そして初婚年齢二十五歳の都市生活者は出産意欲が劣つてゐる反證であると考へても大した誤りがないやうにもおもはれるのである。

三

すでに述べた如く、再集計の關係上、初婚年齢二十二歳の妻の場合も、また初婚年齢二十五歳の妻の場合にも、夫婦關係持續期間十五年のところ、平均出生兒數の計算を打切つたのであつた。しかし初婚年齢二十五歳の妻は夫婦關係持續期間十五年にして三十七歳になるが、妊孕閉止期を四十七歳と假定すれば、なほ十年の妊孕可能期間が残つてゐるわけである。これと同様の理由によつて、初婚年齢二十五歳の妻も、なほ七年の妊孕可能期間を残してゐるわけである。

これらの残された妊孕可能期間中におけるそれぞれの出生力を、現實に示されてゐる出生力の傾向を基準にして推算してみようとおもふ。この場

合、初婚年齢二十二歳の妻も、二十五歳の妻も共に、 $y = a + bx + cx^2$  の公式によつて、それぞれの値を計算した。初婚年齢二十二歳の妻には、夫婦關係持續期間別出生力の傾向は、第一圖によるとほとんど直線的であるので、 $y = a + bx$  の公式を適用すべきであると考へて、一應、計算したのであるが、前者の公式を適用する方が實際によりよく當はまることがわかつた。この計算においては原點を夫婦關係持續期間八年のところ定めた。計算の結果、初婚年齢二十二歳の妻の場合には、 $a = 2.65252$ ,  $b = +0.30218$ ,  $c = -0.00410$  となり、初婚年齢二十五歳の妻の場合には、 $a = 2.18572$ ,  $b = +0.2320$ ,  $c = -0.00581$  となる。

いま、これらの値を當はめて、修正せられた値、ならびに初婚年齢二十歳と二十五歳の妻については、夫婦關係持續期間二十五年のところまで、また初婚年齢二十五歳の妻については、夫婦關係持續期間二十二年のところまで、推算による平均出生兒數を示すと左の第四表の如くである。

第四表

夫婦關係持續期間	初婚年齢二十二歳ノ妻ニ於ケル平均出生兒數		初婚年齢二十五歳ノ妻ニ於ケル平均出生兒數	
	統計觀察値	修正値	統計觀察値	修正値
一 年	0.31	0.34	0.27	0.26
二 年	0.54	0.57	0.53	0.52
三 年	1.01	1.04	0.83	0.82
四 年	1.68	1.71	1.26	1.25
五 年	1.71	1.74	1.37	1.36
六 年	2.01	2.04	1.66	1.65
七 年	2.33	2.36	1.93	1.92
八 年	2.66	2.69	2.25	2.24
九 年	2.95	2.98	2.53	2.52



一〇年	三・三三	三・三三	二・五五	二・六六
一一年	三・五三	三・五三	二・八八	二・八二
一二年	三・八〇	三・八〇	三・〇四	三・〇三
一三年	四・〇五	四・〇六	三・三三	三・三〇
一四年	四・三三	四・三三	三・七七	三・七七
一五年	四・五七	四・五七	三・八八	三・五五
一六年	四・八一	四・八一	三・七七	三・七七
一七年	五・〇四	五・〇四	三・八〇	三・八〇
一八年	五・三六	五・三六	三・九三	三・九三
一九年	五・四八	五・四八	四・〇三	四・〇三
二〇年	五・六六	五・六六	四・三三	四・三三
二一年	五・九八	五・九八	四・三三	四・三三
二二年	六・〇八	六・〇八	四・三三	四・三三
二三年	六・三六	六・三六	四・三三	四・三三
二四年	六・四四	六・四四	四・三三	四・三三
二五年	六・六〇	六・六〇	四・三三	四・三三

初婚年齢二十二歳の妻における平均出生児数は、統計観察値によると、夫婦関係持続期間十五年にして四・五七である。修正値も同じく四・五七であるが、夫婦関係持続期間二十五年までの平均出生児数を、修正値によつてみると、夫婦関係持続期間十七年にして平均五・〇四児の出産があり、夫婦関係持続期間二十二年にして平均六・〇八児の出産がある。五児より六児に増加するには五年を必要とする。夫婦関係持続期間二十五年、すなはち四十七歳に達すると、平均出生児数は六・六〇に増加する。もちろん、初婚年齢二十二歳の妻は、夫婦関係持続期間二十五年にして六・六〇の平均出生児をもつといふのではなく、結婚後十五年間の傾向を基準にして、その後十年間の傾向を推算すればかゝる結果になる可能性があるといふだ

四

右に述べたところは、同一年齢で結婚した妻の一集團中、夫婦関係持続期間別に、その生産力推移を観察したのであるが、出産に關與せざる妻は、これを夫婦関係持続期間別にみて、どれだけ割合を占めてゐるかを觀察することは甚だ興味あることである。初婚年齢二十二歳の妻および初婚年齢二十五歳の妻における無子夫婦の残存数を示すと、左の第五表の如くである。

第五表 夫婦関係持続期間別無子夫婦の残存數

無子夫婦殘存數

夫婦關係 持續期間	初婚年齡二二歲ノ妻		初婚年齡二五歲ノ妻	
	實數	比率	實數	比率
〇年	七四	100.0%	七〇	100.0%
一〇年	五七	充〇〇	一五	七・五
一一年	三七	元〇・七	八	元〇・三
一二年	二三	二五・元	四	三〇・九
一三年	一〇	一〇・七五	三	三・七
一四年	九	七・九三	二	二・七
一五年	四	六・三三	一	一・四
一六年	三	五・五	一	一・四
一七年	三	四・〇	一	一・四
一八年	三	三・六	一	一・四
一九年	三	三・六	一	一・四
一〇〇年	元	三・六	一	一・四
一〇一年	元	三・六	一	一・四
一〇二年	元	三・六	一	一・四
一〇三年	元	三・六	一	一・四
一〇四年	元	三・六	一	一・四
一〇五年	元	三・六	一	一・四

右の第五表でみると、初婚年齢二十二歳の妻においては、結婚後一年における無子夫婦の殘存率は六九・四九%である。結婚後一年にしては、三分の二の妻は無子であることがわかる。夫婦關係持續期間が長くなるにつれて、この無子夫婦の殘存率は次第に少くなるが、この殘存率は、結婚後二年にして二九・一七%、結婚後三年にして一五・一九%、四年にして一〇・七五%、すなはち妻の一割以上は無子の状態にある。結婚後五年以上においても、無子夫婦の殘存率は、逐次、減少の傾向を示しているが、甚だ微弱である。すなはち結婚後五年における無子夫婦の殘存率は

七・九三%であつて、結婚後十五年を経過しても、それは三・二三%まで低下するにすぎない。故に初婚年齢二十二歳の妻においては、その大多數は、結婚後五年間に、出産の經驗をもち、夫婦關係持續期間が五年以上を経験しても、無子の妻はおほむね無子の状態にあることがわかる。

次に初婚年齢二十五歳の妻における無子夫婦の殘存率をみると、結婚後一年にして、七二・九五%である。この場合も、この殘存率は、夫婦關係持續期間の経過につれて、次第に低減してゐる。すなはちこの殘存率は、結婚後二年にして三九・一三%、結婚後三年にして三〇・九二%、四年にして二・六七%となつてゐる。そして結婚後十五年にして二・〇八%である。

いま、無子夫婦の殘存率を、初婚年齢二十五歳の妻と、初婚年齢二十二歳の妻とについて比較してみると、同一の夫婦關係持續期間においては、前者の方が例外なく高い。結婚後一年における無子夫婦の殘存率は兩者においてほぼ接近してゐるが、結婚後三年以上においては、初婚年齢二十五歳の妻におけるこの殘存率は著しく高い。例へば結婚後三年にして初婚年齢二十二歳の妻においては、一五・一九%にすぎないが、初婚年齢二十五歳の妻においては三〇・九二%であつて、二倍以上である。結婚後五年におけるこの殘存率は、前者においては七・九三%であるに對して、後者においては二・七四%であつて、三倍に近い。

また初婚年齢二十二歳の妻においては、結婚後五年にして、無子夫婦の殘存率は一〇%以下になつてゐるが、初婚年齢二十五歳の妻においては、結婚後十五年を経過しても、この殘存率は二・〇八%を示してゐる。

要するに初婚年齢二十五歳の妻は、初婚年齢二十二歳の妻に較べると、同一の夫婦關係持續期間において、常に高き無子夫婦の殘存率を示してゐるのみならず、夫婦關係持續期間の経過に伴ふ減少割合も比較的少く、

觀察期間の範圍内では、一〇%以下に下ることはない。夫婦關係持續期間十五年では初婚年齢二十五歳の妻は五十歳に達してゐるのであるから、これ以上、夫婦關係を持續しても、この殘存率は、おそらく低減することはあるまいとおもはれる。

五

夫婦關係持續期間十五年における子女數別夫婦の分布を、初婚年齢二十歳の妻および初婚年齢二十五歳の妻について、示せば左の第六表の如くである。

第六表 夫婦關係持續期間十五年ニ於ケル子女數別夫婦ノ分布

子女數	妻ノ初婚年齢二十歳ノ場合		妻ノ初婚年齢二十五歳ノ場合	
	數	百分比	數	百分比
〇子	三	三・三	三	一・八
一子	三	四・〇	三	二・三
二子	四	六・三	七	八・三
三子	六	二・五	三	九・六
四子	一	八・六	三	一・八
五子	一	三・〇	四	三・七
六子	一	三・〇	三	三・〇
七子	〇	〇・〇	九	四・三
八子	三	一・七	〇	—
九子	五	〇・七	〇	—
合計	七四	一〇〇・〇	七四	一〇〇・〇

まづ初婚年齢二十二歳の妻についてみると、五子をもつ者最も多く、全體の二二・四五%を占めてゐる。こゝを頂點にして、これよりも子女數の多き者も、また子女數の少き者も次第に少くなつてゐる。すなはち第二位

夫婦關係持續期間と出産力

を占めてゐるのは六子をもつ者の二〇・五六%、第三位を占めてゐるのは四子をもつ者の一八・二八%である。そして一子又は二子をもつ少産の者は、これを合計して、全體の約一〇%であり、無子の者は僅か三・二三%にすぎない。

次に初婚年齢二十五歳の妻についてみると、五子をもつ者最も多く、全體の二二・七一%を占めてゐる。そしてこれを頂點として、これよりも子女數の多き者も、また子女數の少き者も次第に少くなつてゐる。この傾向は初婚年齢二十二歳の妻の場合と全く同一である。ただ第二位を占める者は、初婚年齢二十二歳の妻においては、女子をもつ者の二〇・五六%であつたが、初婚年齢二十五歳の妻においては、四子をもつ者の一八・三六%である。そして第三位を占める者は、初婚年齢二十二歳の妻においては四子をもつ者の一八・二八%であつたが、初婚年齢二十五歳の妻においては、六子をもつ者の一二・〇八%である。すなはち初婚年齢二十二歳の妻においては、六子をもつ者の割合も相當に大であるに反して、初婚年齢二十五歳の妻においては、六子をもつ者の割合は著しく少くなつてゐる。また六子以上をもつ者の割合は甚だ少く、八子以上をもつ者は全くないのである。これに對應して、一子又は二子をもつ少數の妻の割合は、初婚年齢二十二歳の妻の場合に較べて、著しく多く、これを合計すると、全體の二〇%以上に達してゐる。さらに無子の妻は一二・〇八%にも達してゐて、初婚年齢二十二歳の妻に較べると、三位以上の高率である。

六

夫婦關係持續期間が長くなれば長くなるほど、妊娠可能期間内においては、出生兒數は次第に増加する。しかし、これらの出生兒はすべて生存を

續けるわけではなく、死亡する者のために、出生兒數と生存兒數とは決して一致するものではない。夫婦關係持續期間十五年間に、出生兒のうち、どれだけの者が死亡し、どれだけの者が生存するかは、夫婦のもつ子女數を問題とする場合、甚だ重要な意味をもつものといはなければならぬ。

「出生力調査」においては、夫婦關係持續期間別に出生兒數を調査すると共に、死亡兒數についても調査したから、子女の生存年數別生存子女數を計算してみた。ただ計算の結果からみて、死亡せる子女に關する記入が不正

確なため、死亡子女數は實際よりも少くないやうな印象を受けるのである。しかし、どの程度、その記入が不正確であるかを判別する何らの資料もないから、こゝでは、調査票に基いて計算せる結果を有りのまま報告するほかない。この疑問とする點は、他日、別個の資料を手に入れて、吟味することにした。

まづ初婚年齢二十二歳の妻について、夫婦關係持續期間および子女の生存年數別に見た生存子女數を示すと、左の第七表の如くである。

第七表 夫婦關係持續期間別及び子女ノ生存年數別生存子女數(初婚年齢二十二歳の妻)

子女の生存年數	夫婦關係持續期間														
	〇年	一年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	一〇年	一一年	一二年	一三年	一四年
〇	三七	三三	三二	三六	三四	三三	三四	三〇	三七	三九	三八	三六	一六	三三	一八
一		二五	三〇	三〇	三五	三三	三三	三九	三八	三五	一九	二六	一八	二七	一七
二			二〇	二五	二九	二九	三三	三三	三三	三〇	一九	一九	二〇	二七	一七
三				二〇	二九	二九	三三	三三	三三	三〇	一九	一九	二〇	二七	一七
四					二〇	二九	二九	三三	三三	三〇	一九	一九	二〇	二七	一七
五						一九	二八	二八	三三	三〇	一九	一九	二〇	二七	一七
六							一九	二八	二八	三三	三〇	一九	一九	二〇	二七
七								一九	二八	二八	三三	三〇	一九	一九	二〇
八									一九	二八	二八	三三	三〇	一九	一九
九										一九	二八	二八	三三	三〇	一九
一〇											一九	二八	二八	三三	三〇
一												一九	二八	二八	三三
二													一九	二八	二八
三														一九	二八
四															一九
五															
六															
七															
八															
九															
一〇															
合計	三七	三五	五三	六八	九四	一四六	一四七	一七五	一七五	一八七	二〇〇	二〇九	二一〇	二二五	二四七
一夫當り平均	〇・三	〇・三	〇・四	〇・五	〇・七	一・〇	一・〇	一・二	一・二	一・三	一・四	一・四	一・五	一・六	一・七



